兄の彼女が非常識過ぎて困る

にゃんEX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
兄の彼女が非常識過ぎて困る

【Ｎコード】
Ｎ３０３６Ｕ

【作者名】
にゃんＥＸ

【あらすじ】
日本のごく一般的な家庭で生活する。平賀琴美（１５）には悩みがあった。それはこの前兄に彼女が出来たことだった。
兄より年上。それはいい。
会ったその日から同棲することになった。それもいい。
では何が駄目だって？
非常識すぎるのだ。その彼女は・・・。

第1話　非常識な彼女（前書き）

思いついたネタを書いてみたら結構な長さになったので・・・。

第1話　非常識な彼女

皆さんこんにちは、私の名前は平賀琴美と申します。突然ですが私は今非常に困っています。
えっ？何に困っているかですか？

兄の彼女が非常識すぎるのです。一月前に彼女が兄を連れて来てから、毎日私の常識をガリガリ削っていくのです。

えっ？彼女が兄をって、兄が彼女をの間違いじゃないのかって？
いえ、それが誤字じゃないのです。なぜなら彼女が気絶した兄をお姫様抱っこで連れてきたのですから。

普通逆だろ！？ええ、私もそう思いました。何より見かけほっそりした女性が、デブでは無いとは言え標準的な高校生男子（１７５ｃｍ６４Ｋｇ）をお姫様抱っこしているのですから・・・。

最初の出会いからどこかおかしかったのですが、さらに彼女はそのまま我が家に居座ってしまったのです。
そして今は、リビングでゲームをしながら台所で包丁を振るっています。

何かおかしい？いえ、それがおかしくないのです。何せ分身してますから・・・。

「お母さーん。これくらいかな？」

「ん～～調度いいわ上手ねサナちゃん。琴美もこれくらいできればいいんだけど・・・。」

「大丈夫ですよ。そのうち好きな人でも出来たら自然と覚えますって。」

「それもそうね。あら？これは？」

「あっ、それは故郷の料理です。ちょっと変わってますけどおいしいですよ。」

「あら、本当おいしいわ。」

母との関係は非常に良好だし、料理もうまい。そしてリビングに居るほうは・・・。

「喰らえ！！必殺！！」

「甘い甘いわ！！綿菓子より甘いわ！！」

「ああ！？カウンターー！！」

兄と格闘ゲームをしている。最近では強くなりすぎて足でプレイしてようやく互角らしい。

あっ、ちなみに兄の彼女の名前はサナ。本当は違うのですが、正直発音できないので、皆サナと呼んでいます。

「あ、琴美そろそろご飯だからお父さん呼んできて。」

「はーい。」

外に出て車庫に入る。

「お父さん。そろそろご飯だよ・・・って、何やってるの？」

車庫ではサナと父が何か良くわからない機械を弄くっている。こんな機械あったっけ？

「ん？もうそんな時間か。サナちゃんご飯だよ。」

「ん？私の場合は本体が食べていれば大丈夫だけど、世間体が悪いわね。私も上がるわ。」

「ところでその機械何？」

「あ、これはバイオ燃料作成装置だよ。」

「は？」

「えっとねサナちゃん説明お願い。」

「これは空気中の成分と水と後は太陽光のエネルギーでガソリンに近い燃料を作り出す装置よ。ガソリンが値上がりして困ると父さんが言っていたから作ってみました。」

えーと、それってオーバーテクノロジーもいいところだよね・・・。それを簡単に作ってみましたって・・・。

「いやー本当に助かるよサナちゃん。」

「いや、お父さんそんな軽い物じゃないよ。これ。」

「「気にするな。」」

「気にするよ！」

分身は当たり前、オーバーテクノロジーを容易に生み出し、ゲームも楽勝な兄の彼女サナが何者かというと、

「異世界の神様。」

なのである。普通の人間がそんなことを言い出したら黄色い救急車を呼ばれるけど、前にあげたこと以外に色々とやらかした為、信じざるを得ない。トリック無し空中浮遊や、何も無いところで火をおこしたり、水の球を飛ばしたり、近所に在った暴力団事務所が壊滅したり、下着ドロが電信柱に逆さ吊りにされたり、銀行強盗がボロボロの状態で警察に自首したり・・・。

ともかく非常識極まりないのだ。

「フューーー」

「ジョン！」

「ハッ！！」

「私はお前を倒す者だ！」

分身を戻す時にいつも某漫画のポーズをするお馬鹿だけど・・・。変身まで使っていつも違う姿になるので、私も家族もいつも大笑いするけどね・・・。

害は無いのだけど、非常識すぎて友達を呼ぶことが出来ないのだ・・・。最近付き合いが悪いので「彼氏が出来た」とか噂されて困るのだ。はあ、せめて一般常識レベルのことだけしてくれればいいんだけど・・・。

第2話　勉強

さて、夜になって兄の部屋から二人の声が聞こえてくる。皆さんは恋人同士の大人のプロレスごっこと思うだろう。私も最初はそう思って無駄にドキドキした。

しかし現実は非情である。

『童貞乙ｗｗｗ』

『どどど童貞ちゃうわ！！』

『どもりすぎ乙ｗｗｗ』

いちゃいちゃしているのだが、結局兄がヘタレなためキス程度で終わるらしい。その後は・・・。

『天使の６枚羽を手に入れたわ。』

『そ、それ激レア装備だぞ・・・。早速装備しろよ。』

『嫌よ。羽が六枚なんて気持ち悪いじゃない。』

『あーそういえば、実際の天使は羽なんて生えていないんだっけ？』

『ええ、あれは人間が勝手に想像してつけたものよ。実際姿を現すときは無駄にバックライトをかけて姿を見えなくするからねー。というわけで露天売り頼むわね。』

『ういういぃ。交渉は任せろ。』

『こういう微妙なアクセサリーより武器が欲しいわ。』

『これを売ればそこそこの物が仕入れられると思うぞ。』

『ええ、お願いね。』

普通にネトゲしてやがる・・・こっちは受験生だというのに・・・。

「そこ間違ってるわよ。」

「あっ、本当だ。」

何故か分身が私の勉強も見てくれているけど・・・。

「隣が気になるのは、お年頃だからわからないでもないけど「ブッ！」、この国では高校卒業くらいしないと就職が大変なんでしょ？頑張りなさい。」

「はーい。」

『これぞ我がスタンド能力だ！！戦闘は本体が！チャットはスタンドがこなす！！』

『本体がマウスを操作して、半透明の分身がキーボードを打っているだけじゃねーか。一人二人羽折り乙ｗｗｗ』

「・・・サナさん。」

「何？」

「ジョジョはお好きですか？」

「それほどでもない。」

「勉強続けます。」

「それが良い。」

ああ、来た当初はネタにまみれてなかったのに、段々汚染されていく。兄のせいか？いやネットか？ネットが悪いのか？

「悪いとするならば、この国でしょうね。ここの人間の想像力は我々のそれをはるかに超えているわ。手塚先生はマジ神ね。」

「心を読まないでよ。」

「顔に出ていたわよ。まぁそんなことより次は英語ね。」

「はあ・・・英語苦手なんだよね～。ねえ、神様パワーで何とかなら無いの？」

「ふぅん？やってもいいけど、人間の脳神経では負荷に耐えられずに、寿命が縮んだり、運が悪ければテーレッテーになるわよ。」

「流石に頭がパーンッは勘弁だわ。努力しかないのね・・・。」

「見本の発音をしてあげるから、それで慣れなさい。」

「はーい。」

学校の先生より発音が良いし、教え方もうまいんだけど・・・。教材がジョジョ（英語版）とシグルイ（英語版）とか、ちょっとおかしくない？

「下手なテキストで文法をガリガリ暗記するよりこっちのほうが、後々役に立つわ。それに面白いでしょ？」

「まあ、面白いですけど・・・一応受験勉強なんですが・・・。」

「大丈夫よ。暗記関係はこっそり睡眠学習させているからね。」

「どうりで最近習った記憶の無い英単語が頭にあると・・・。」

彼女に教わるようになってから、成績は右肩上がりだけど・・・。

「まさかモビルスーツの型番が分かるのも・・・。」

「この琴美はワシが育てた。」

「勝手にオタク知識をインストールするな！！」

「残念、人間の脳はアンインストールできない！」

こうやって余計な知識もいっぱい植えつけられるのだ。この前科学だと偽って魔法科学も教えられたし・・・。

「私の知識の常識までガリガリ削るな！！」

「常識？それのどこが面白い！」

「ええい、この知識の悪魔め！！」

「悪魔で結構、悪魔らしいやり方で勉強を教えてあげますからね。」

「うわーん。」

閑話1　未知との遭遇（前書き）

最初はこれが1話目でした。

閑話1　未知との遭遇

俺の名前は平賀真人ごく普通の高校生さ、変ったことがあるとすればちょっとオタクだってところかな。

オタクライフを満喫している俺だけど、そろそろリアル彼女が欲しいので出会い系サイトに登録したのだが・・・・その直後パソコンが故障しやがった・・・。

畜生！保障期間中だったので修理費はかからないが、かかった時間は戻らない。これだからＳ○ＮＹ製は・・・。

「帰ったら新しい出会いが待ってるぜ！」

はやる気持ちを抑えつつ、家路を急ぐ。

「のわっ！」

もうすぐ自宅というところで目の前に突然鏡のようなものが現れた。

「ま、まさかこれは・・・。」

宙に浮かんでいる鏡の横に回ると厚みが無い、おまけに持っているペンを差し込むとペンの先が消えるが、抜くと元に戻っている。

「ヒャッホーー！ゼロの使い魔だ！」

平賀才人と一字違いというのは何か意味があるのかと思っていた

が、もしかすると俺は平行世界の平賀才人だったのか！

「こ、これは潜り抜けないと！よーーしいくぞ！・・・・ヘブァホ！」

助走をつけて飛び込もうとしたところで鏡から飛び出した影に吹き飛ばされた。

「ちょっ・・・・、そりゃねぇよ・・・・。ガクッ。」

俺の意識はソコで途切れた。

※　道端に現れた鏡が必ずしも某虚無魔法使いの召喚魔法とは限りません。安易に飛び込むのは止めましょう。

時間は少々さかのぼり、地球とはまた違う異世界・・・・。

「フンッ！！」

黒い衣を着た女性が手にした杖を振り衝撃波を生み出す。その衝撃波は迫っていた白い甲冑の集団を吹き飛ばす。

「全くしつこいわねえ・・・貴方達じゃ役不足よ～いい加減学習しなさい。」

妖艶な笑いを浮かべる女性。それをやや遠巻きに取り囲み、包囲する白い騎士達。

「黙れ！悪しき邪神めが！神の裁きを受けよ！！」

その中の一人が激昂し叫ぶが、女性は全く意に介さずクスクス笑う。

「あらあら、神の裁きだなんて、人間は何時も同じことを言うわね。でもね、神は人に無関心よ。もちろん私にもね。貴方たちが信仰している神は時々気まぐれに恩恵は与えるけど、それは貴方たちだけじゃないわ。もちろん、私もあの神の恩恵は受けているわよ。そこが理解できない貴方たちが神を語るなんておこがましいにも程があるわ。」

「黙れ！黙れぇ！！」

さらに激昂して切りかかる騎士達。それを意に介さず杖を振って吹き飛ばす女。これまで何度も繰り返された光景に、女のほうが疲れた顔をし始める。

「くっだらないわねえ～～。いい加減学習しな・・・っ！！」

突如、女の足が動かなくなる。女は初めて驚愕に顔を染め、反対に周りの騎士達が歓声を上げる。

「こ、これは対神捕縛結界じゃない！こんな骨董品どこから見つけてきたのよ！？」

「邪神を捕らえることが出来たぞ！！これで俺たちの勝ちだ！！」

勝どきを上げる騎士達。倒れていたものたちも立ち上がり、動けない女を見て喜色を浮かべる。

「はあ～～、でもこれを使うと貴方たちじゃ私を攻撃できないのよ？？ただ動きを止めるだけで私を倒せると思ってるの？」

半ば呆れた顔をして、この結界の欠点を言う女。女の言うとおり、これは強力な捕縛結界でどんな相手でも動きをとめることが出来る。しかし、結界の外側から攻撃すると攻撃を無効化してしまうという困った結界なのだ。

「確かに、我々は１００年以上かけても貴様を倒すことが出来なかった・・・。だが、人は成長するものだ！！」

「あら、いい言葉ね。でも成長する割には特に何もしない私を追い掛け回すという阿呆なことをしているけどね。」

「フンッ、戯言を・・・。まあいい動きを止めればこの魔法を使うことも出来る。」

男が指を鳴らすと、女の周りが光り輝きながら、空気が渦を巻くように動き始める。

「！？何、この魔力の流れ・・・こんな魔法知らないわ！？」

「フフッ、これぞ我が教会の研究者が新たに生み出した魔法だ。我々では倒すことの出来なかった邪神よ！この世界から消えうせろ！！！」

「なっ！？キャアアアア！！！！！」

女の絹を裂くような悲鳴と共に、まばゆい光に包まれる。そして光が治まるとそこには何も無かった。

「あいたたた・・・。ここ何処よ？えっ、君、大丈夫！？」

第3話　お客さん

「ただいまー。」

学校が終わり、友人の追及をかわして帰宅。鍵のかかっていない玄関を開けて靴を脱ぎ・・・ん？見覚えの無い靴というか下駄？サナのかな？最近和装にはまり気味だし。

「うんうん。わかるわかる。」

そんなことを思っているとキッチンからサナの声が聞こえる。誰かと話しているようだ。キッチンに行き中を覗くと、サナがお茶を飲んでいる。お茶請けだろうか？饅頭がテーブルの中央に置かれ、サナの向かいにも茶が置かれている。

「そうですねえ。人間はそういうものですよ。世界が変わっても変わりませんね。」

誰かに話しかけるように独り言を言うサナ。向かいに誰も居ませんよ・・・？

「へえ、琴美ちゃんが昔、かくれんぼでうまく隠れすぎて見つけてもらえず。夜まで隠れていて大泣きしていたと・・・ププッ！」

ちょっ！私の黒歴史！！何故知っている！！

その時、サナの向かいの席に置かれた茶碗が浮いて・・・まるで誰かが飲むかのように傾き、再び机に置かれる。良く見ると中身が減っている。続いて饅頭が同じように空を飛び何も無い空間に齧り

取られる。

「は??」

「あ、琴美ちゃんおかえり。」

「えっ、ああ、ええっと、ただいま。」

「どうしたの?」

「えっとあの、その・・・お客さん?」

何も無い空間を指差してたずねる。

「こら、神を指差さないの、一応この辺りを守っている土地神様なんだから。」

ちょっと、お姉さん怒ってますといった感じで怒られる。

「えっ、すいません。でも見えないもん。」

「あっ、そうだった。琴美ちゃんは神様とチャンネル合わせられないからね。あっ、三つ葉さん琴美ちゃんに合わせて貰えますか?えっ、カゴメ屋の羊羹か三角堂のシュークリームなら手を打つと、わかりました明日持って伺います。」

そう言うと、サナの前の席がふわりとした光に包まれ、狐面をつけた藍色の着物を着た女性が現れた。

「こうして会うのは初めてですね琴美ちゃん。この辺りを守護して

いる三つ葉と申します。」

「あ、平賀琴美です。えっと・・・。もしかして三つ葉様は近くの雷神社の・・・。」

「ええ、古くは神鳴りと書いたのですが、江戸時代でしたかねえ、そのときに今の雷に直されましたね。昔からこの土地の豊饒と子孫繁栄を司ってきた神ですよ。」

「もしかして祭りの時も・・・。」

「ええ、皆さん良くしてくれます。」

近くの雷神社では年に一度、１０月の半ばにお祭りがある。この祭りでは面をつけた女性には無条件で奢れという良くわからない風習が有り、琴美も色々とご馳走になったものだ。

「もしかしてあれって三つ葉様が・・・。」

「・・・あなたも恩恵を受けているでしょ？去年は、綿菓子から始まって焼きソバにお好み焼きにベビーカステラ、りんご飴、たこ焼きに・・・。若いうちはいいけど適度にしないと太るわよ？」

薮蛇だった。流石神様、私がうろ覚えなこともしっかり覚えてやがる。

「はーい。気をつけます。」

「それじゃ、私は帰るわね。そろそろ子供たちが神社に来る頃だし。」

そう言うと、三つ葉様は立ち上がりふわりと浮く。もうこれくらいじゃ驚かなくなってきたなあ。

「ええ、また明日ね。」

「楽しみにしているわ。それじゃ、またね。」

軽く光ったと思うと瞬時に消える三つ葉様。はあ、非常識な彼女の友人はまた非常識か・・・。

私の平穏はいったいどこにあるのだろう？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3036u/

兄の彼女が非常識過ぎて困る

2011年7月1日21時57分発行